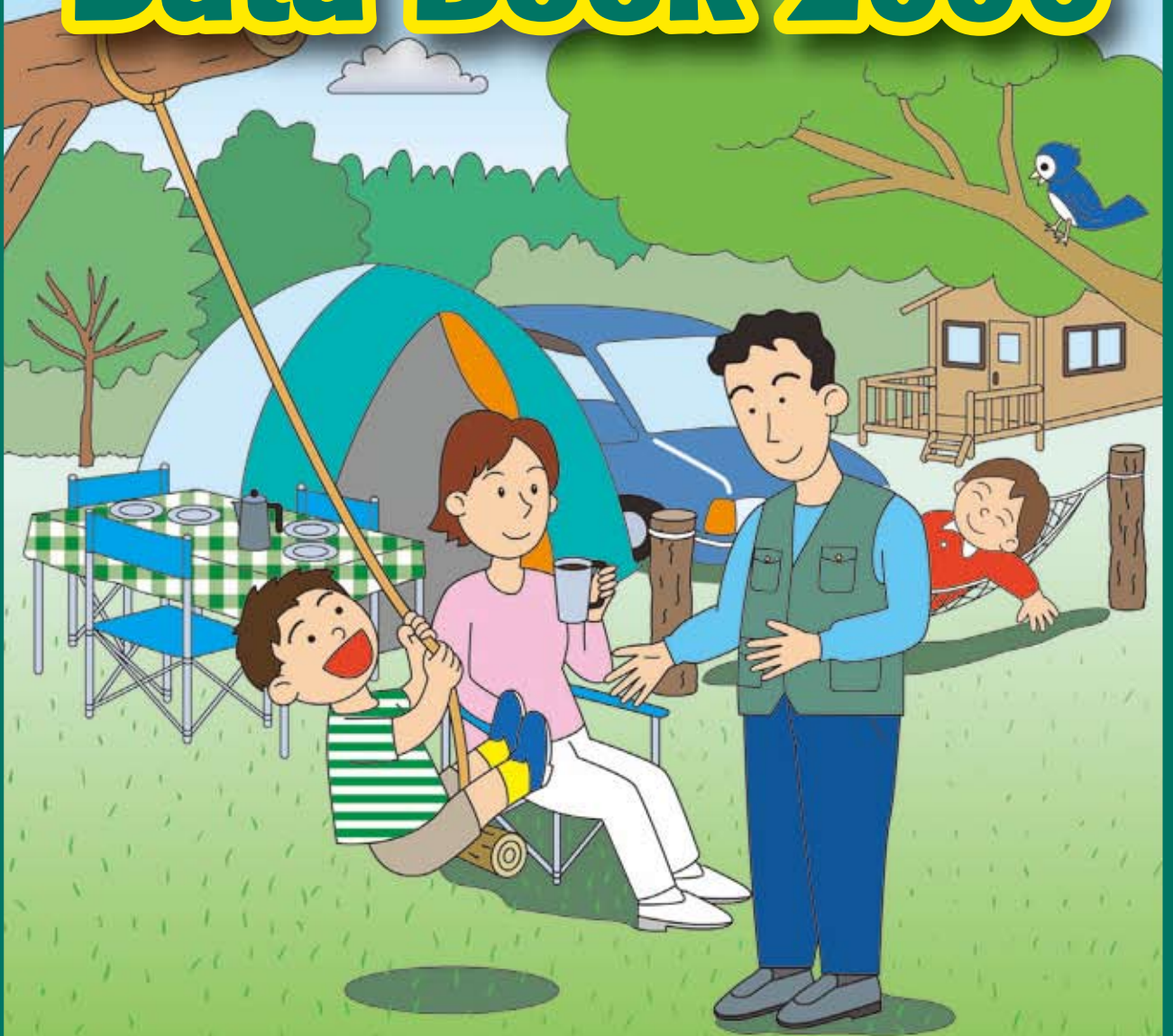


Camp

Data Book 2006



キャンプがわかる!

キャンプが子どもを育てます

キャンプは遊び。
でも、人生に必要なことが
たくさん学べる遊びです。



！ 自然そのものが もたらしてくれる学び

自然の中は、人間の五感に働きかける不思議な刺激に満ちています。これらの刺激は、私たちに感動や驚きを与え、知的好奇心や探究心を喚起させてくれます。そして、直接実物を見たり聞いたり、触れたりする体験は、知識を本当の意味での知識として定着させることに役立ちます。

！ 集団による活動・共同生活が もたらしてくれる学び

キャンプの小グループでの生活や活動では、一人ひとりが自主的・主体的に行動し協調性のある態度や行動をとることが求められます。キャンプは、他者との深い交流の中で信頼感を育てより良い人間関係のあり方を学ぶ機会を提供してくれます。

！ 自然の中での生活や活動が もたらしてくれる学び

自然に対する理解は、日常生活における環境保全や自然愛護への積極的な態度を培います。また、自然の中での素朴な生活や活動は、向上心や創造力を育むことにつながり、キャンプで得た知識や技術は、危険を回避し安全を確保する能力、自らの安全は自らが守るという意識を高めます。

！ 新しい体験が もたらしてくれる学び

キャンプの体験は普段味わうことのできない新鮮な感動をとまなびます。そのためこれまで気が付かなかった自己の長所や能力を発見し、短所を知る機会となります。そして、自然を活用した楽しく新鮮な活動は、生涯にわたって余暇活動を行うための新たな興味・関心を喚起し、健全で豊かなライフスタイルの形成にも役立ちます。

子どもの自然体験が減少している！

このデータは、子どもの自然体験がどれくらいあるかを調べたものです。平成10年と平成17年に、全国の小学校4・6年生と中学校2年生を対象に同じ質問をした調査結果の一部を比較しました。

「海や川で泳いだこと」がない子どもは、平成10年調査の10%から平成17年調査の26%に増加しています。

同じように、「昆虫をつかまえたこと」がない子どもは、19%から35%に増加。

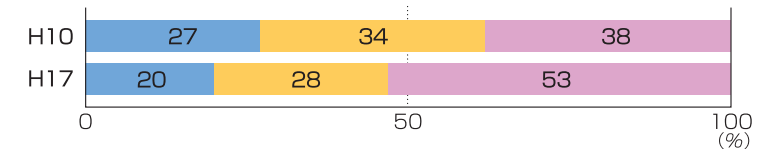
「満点の星空を見たこと」がない子どもは、22%から35%に増加。

「日の出や日の入りを見たこと」がない子どもは、34%から43%に増加しています。

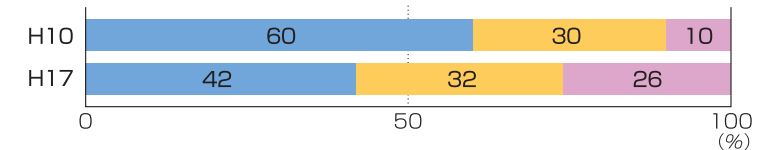
この7年間で、子どもの自然体験が大きく減少していることをデータは示しています。

なお、平成10年のデータは、青少年教育活動研究会が全国約8,500人を対象に実施した調査、平成17年のデータは、国立オリンピック記念青少年総合センターが全国約15,600人を対象に実施した調査です。

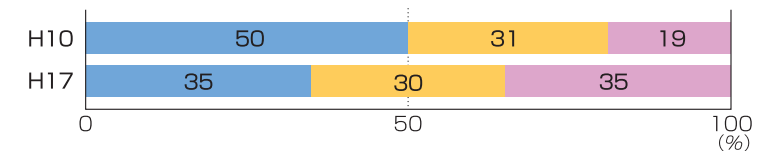
■ キャンプをしたこと



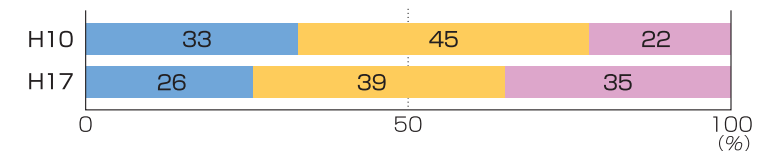
■ 海や川で泳いだこと



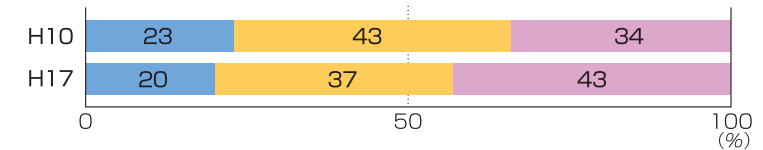
■ チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと



■ 夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと



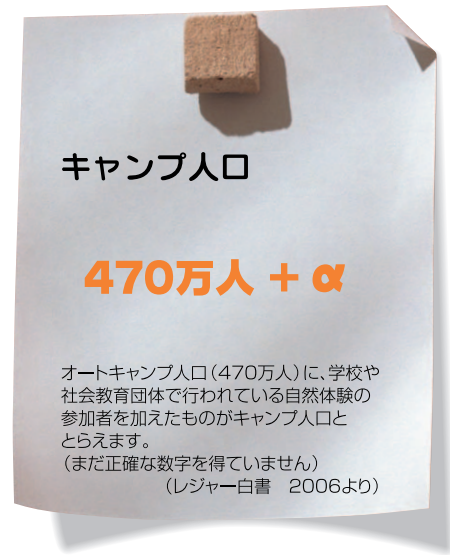
■ 太陽が昇るところや沈むところを見たこと



■ 何度もある ■ 少しある ■ ほとんどない

※パーセントの数値は小数点以下を四捨五入しているため、その和は必ずしも100%に一致しない。

数字で見るキャンプ



山で熊に出会う機会が増えています

■2006年度 クマ有害捕獲、人身事故数(10月30日現在)

県	有害捕獲数	人身事故(人)	県	有害捕獲数	人身事故(人)	県	有害捕獲数	人身事故(人)	県	有害捕獲数	人身事故(人)
青森	74	けが 7	群馬	241	けが 7	富山	129	けが 8	京都	14	
岩手	213	けが 14	埼玉	13				死者 1	兵庫	13	けが 1
宮城	178	けが 5	東京		けが 1	石川	53	けが 2	奈良		けが 1
秋田	196	けが 15	山梨	65	けが 3	福井	141	けが 8	鳥取	6	
山形	363	けが 5	新潟	146	けが 9	岐阜	150		島根	23	けが 2
福島	301	けが 9	長野	398	けが 13	静岡	15		広島	124	
栃木	82	けが 1			死者 2	滋賀	14		山口	4	

朝日新聞 2006年10月31日(火)朝刊

雷の事故にご用心

■雷による事故

発生日	発生場所	区分	事故の様子
2006/4/25	東京都奥多摩町本仁田山	登山	午前中、本仁田山の太休場尾根(920m)に落雷。川苔山を目指し登山中の1人死亡、1人負傷。激しい雷雨の中、雨具を着るために大きな木の下にいた。死亡したのは、ヒマラヤ・マナスルを西壁から登頂した経験を持つベテランの登山家。雷注意報が前日夕刻から継続して発表されていた。
2005/8/4	長野県松川町松川高原	キャンプ、雨宿り	県の青少年宿泊施設にキャンプに来ていたグループの内、約30人がキャンプ場の炊事場で小雨を避けている最中、壁のないトタン葺きの木造炊事場の柱に落雷。木の柱から約50cmにいた中学生1人が心肺停止。蘇生術により2分後蘇生したが重症。他に、引率の大人2人と児童・生徒5人が耳を負傷。
2005/5/21	北海道上川町烏帽子山	登山	大雪山系烏帽子山頂上付近に落雷。登山客1人が負傷。
2004/7/26	韓国 忠清北道	登山	傘を差して登山中に落雷。1人死亡。
2004/7/25	三重県菰野町 御在所岳	登山	下山中に落雷。2人負傷。
2004/7/25	長野県白馬村 不帰嶮	登山	標高2500m地点で落雷。登山客1人死亡、3人負傷。
2004/7/25	長野県白馬村 不帰嶮	登山	別の落雷で登山客3人負傷。
2004/7/25	長野県大町市 爺ヶ岳	登山	登山客が落雷で5人負傷。(「岳人」2004年10月号148頁に詳報。)
2004/7/25	山形県 蔵王連峰八方沢	登山	激しい雷雨で、大学生4人道迷い遭難。(7/26 4人とも無事下山)
2004/7/24	福島県檜枝岐村 帝釈山	登山	雷鳴が聞こえたので、切り通し状の窪地になっている岩場に避難したが、避難した岩上の木に落雷。1人死亡、6人負傷。(「山と渓谷」2004年10月号195頁に詳報。)
2004/7/24	長野県穂高町 大天井岳	登山	登山中に落雷。1人意識不明の重体。
2003/5/20	岐阜県丹生川村 乗鞍岳	スノーボード	剣ヶ峰頂上で昼食中、スノーボードに落雷。近くにいた1人が負傷。
2002/8/2	長野県長谷村 塩見岳	登山	登山ガイドが同行した旅行会社企画の登山ツアー。塩見岳方面から本谷山へ登りかける稜線で、遠雷が聞こえていた中、雨が降ってきたので、高さ3~4mの木の周りに集まり、雨合羽を着ている最中、木に落雷。1人死亡、4人負傷。

(社)日本キャンプ協会(2006年)

■落雷事故発生状況(平成13~17年)

H13年			H14年			H15年			H16年			H17年		
発生件数	死者・行方不明者数	負傷者数	発生件数	死者・行方不明者数	負傷者数	発生件数	死者・行方不明者数	負傷者数	発生件数	死者・行方不明者数	負傷者数	発生件数	死者・行方不明者数	負傷者数
64	4	13	84	1	16	35	3	6	99	2	12	661	6	26

警視庁 平成18年警察白書

キャンプ人口について、レジャーキャンプ(オートキャンプ)の人口は減少しているが、サマーキャンプなど子ども対象の教育的なねらいを持った自然体験の機会は増加しているように捉えている。近年のうちに全国調査を行い、明らかにしていきたい。

野外における事故から「熊」と「雷」に関する事故をピックアップした。最近、山で生活しにくくなって動物が人里に下りてくる傾向があり、現場の指導者にとっては頭を悩ませる状況になっている。雷については、最近、天候の不安定さが目立ってきており、集中豪雨と共に配慮したい。天候の急変などが予想される場合には、ただちに活動を中止できるよう勇気ある判断を持って活動に臨みたいものである。

キャンプの周辺を数字で見る

1 統計にみる余暇活動参加

余暇活動の動向を統計からみてみましょう。表1は、H9年からH17年までの余暇活動参加人口の推移を示しています。活動によって程度の差がありますがH13年頃をピークに年々参加人口が減少していることがわかります。オートキャンプなどは、ピーク時の2/3まで減少しています。また、表2は、現在の余暇生活の満足度を示していますが、前回調査（平成15年）に比較するとわずかですが満足が減少し不満が増えています。いずれも統計からは、巷の好況感が余暇活動には反映されていない様子が伺えます。

図1は、今後実施してみたい余暇活動（運動・スポーツ）を示したグラフです。ウォーキング、軽い水泳、体操というように軽スポーツが上位を占めています。気軽に（身近で、安く）、個人でしかも身体にいい活動が好まれるようです。手間のかかる、ハードな活動は、敬遠されがちともいえるかもしれません。このようにみると、表2に示されるような余暇活動が減少傾向にあることもうなずけるような気がします。

（表1）余暇活動参加人口の推移 —観光・行楽部門—

	参加人口（万人）									
	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	
(1)遊園地	3,670	3,590	3,420	3,550	3,640	3,550	3,170	3,190	2,930	
(2)ドライブ	6,020	6,200	5,960	6,060	6,180	5,940	5,570	5,510	5,220	
(3)ピクニック、ハイキング、野外散歩	3,400	3,490	3,380	3,450	3,490	3,410	2,750	3,060	2,620	
(4)登山	820	890	800	930	840	880	650	630	660	
(5)オートキャンプ	690	740	690	790	760	680	660	550	470	
(6)フィールドアスレチック	410	440	390	410	380	350	310	250	250	
(7)海水浴	2,640	2,590	2,380	2,440	2,550	2,370	1,900	2,010	1,940	
(8)動物園、植物園、水族館、博物館	4,360	4,200	4,040	4,190	4,430	4,270	4,050	4,060	3,930	
(9)催し物、博覧会	2,660	2,490	2,350	2,350	2,720	2,310	2,050	2,170	2,420	
(10)帰省旅行	2,340	2,350	2,360	2,370	2,470	2,300	2,310	2,330	2,510	
(11)国内観光旅行（避暑、避寒、温泉など）	6,190	5,640	5,670	5,990	6,430	6,310	5,900	6,080	5,830	
(12)海外旅行	1,420	1,270	1,410	1,420	1,270	1,240	970	1,200	1,290	

（財）社会経済生産性本部 レジャー白書2006

（表2）現在の生活に対する満足度 —レジャー・余暇生活—

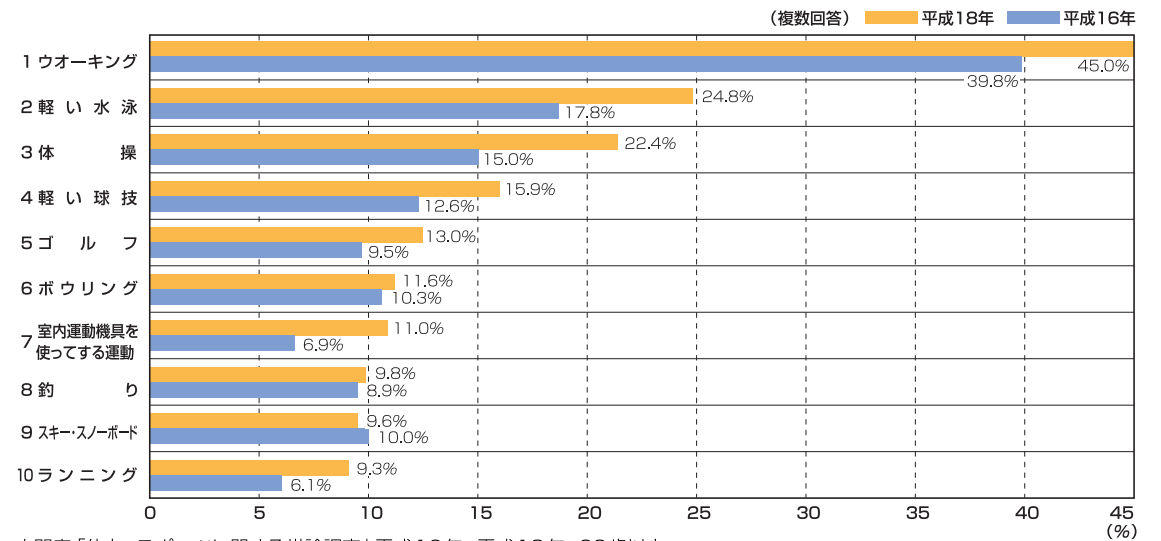
	該当者数	満足			不満			どちらとも いえない	わからない
		人	%	%	人	%	%		
総数	7,005 (7,030)	55.8 (56.8)	9.1 (10.6)	46.7 (46.3)	39.7 (39.3)	27.3 (26.3)	12.4 (13.0)	3.8 (3.0)	0.8 (0.9)
〔性〕									
男性	3,195 (3,240)	53.9 (54.2)	8.3 (9.7)	45.6 (44.5)	42.0 (41.7)	28.4 (28.4)	13.6 (13.4)	3.5 (3.1)	0.6 (1.0)
女性	3,810 (3,790)	57.4 (59.1)	9.8 (11.3)	47.6 (47.8)	37.8 (37.2)	26.4 (24.5)	11.4 (12.7)	3.9 (3.0)	0.9 (0.8)
〔性・年齢〕									
（男性）									
20～29歳	321	60.1	10.6	49.5	36.4	27.1	9.3	3.1	0.3
30～39歳	453	52.5	9.1	43.5	45.0	29.8	15.2	2.0	0.4
40～49歳	524	45.8	6.1	39.7	51.9	35.7	16.2	2.1	0.2
50～59歳	648	47.5	6.2	41.4	48.3	32.7	15.6	3.9	0.3
60～69歳	720	59.4	8.9	50.6	36.3	23.1	13.2	4.0	0.3
70歳以上	529	59.4	10.2	49.1	32.9	22.7	10.2	5.5	2.3
（女性）									
20～29歳	387	64.6	15.0	49.6	31.3	24.8	6.5	2.8	1.3
30～39歳	635	55.4	8.5	46.9	42.7	30.7	12.0	1.7	0.2
40～49歳	642	52.3	6.1	46.3	45.5	31.6	13.9	2.2	—
50～59歳	806	54.6	8.7	45.9	40.8	28.0	12.8	4.3	0.2
60～69歳	737	60.2	10.6	49.7	36.0	24.3	11.7	3.1	0.7
70歳以上	603	60.4	12.3	48.1	26.9	17.9	9.0	9.3	3.5

（注）1 内閣府大臣官房政府広報室「国民生活に関する世論調査」（16年6月）による。

2（ ）内の数字は、平成15年6月に行った同調査の結果。

出典：17年版観光白書

（図1）今後、行いたい運動・スポーツ種目（トップ10）



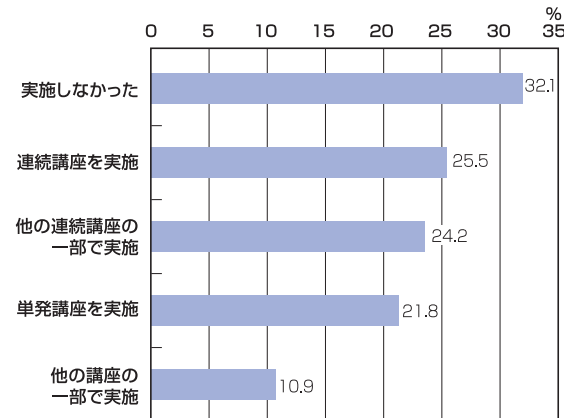
内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」平成16年・平成18年：20歳以上

2 地域における環境教育活動

図1は、公民館における環境教育の講座実施状況について調べたものです。なんらかの形で7割近い公民館が講座を実施していることがわかります。また、図2では、環境教育の専門講座を実施している理由についてたずねたものです。最も多い理由は、「現代的課題の一つ」であることであり、次に「市町村環境政策の一環」「まちづくりの一環」と続いています。今や環境問題が他人事ではなくて、身近な問題となっていることが理解されるのではないのでしょうか。国や行政レベルの取り組みだけでなく地域住民における取り組みがますます必要になるのではないのでしょうか。

（図1）講座の実施状況

平成15年度に環境教育の講座を実施したか（複数回答）n=165

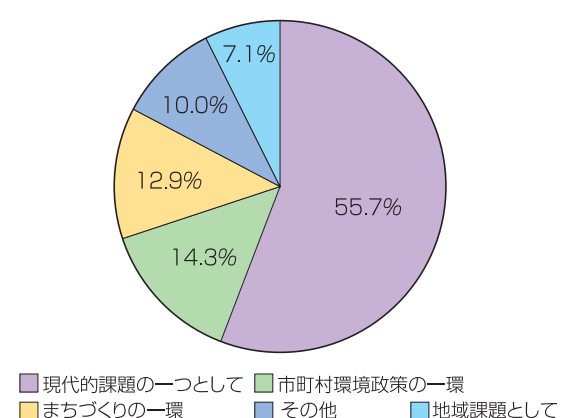


国立教育政策研究所社会教育実践研究センター

平成17年度 社会教育事業の開発・展開に関する調査研究事業「環境教育プログラムの開発に関する調査研究報告書」

（図2）講座の実施理由

環境教育の専門講座を実施している理由は何ですか（複数回答）n=70



今の子どもたちの健康問題

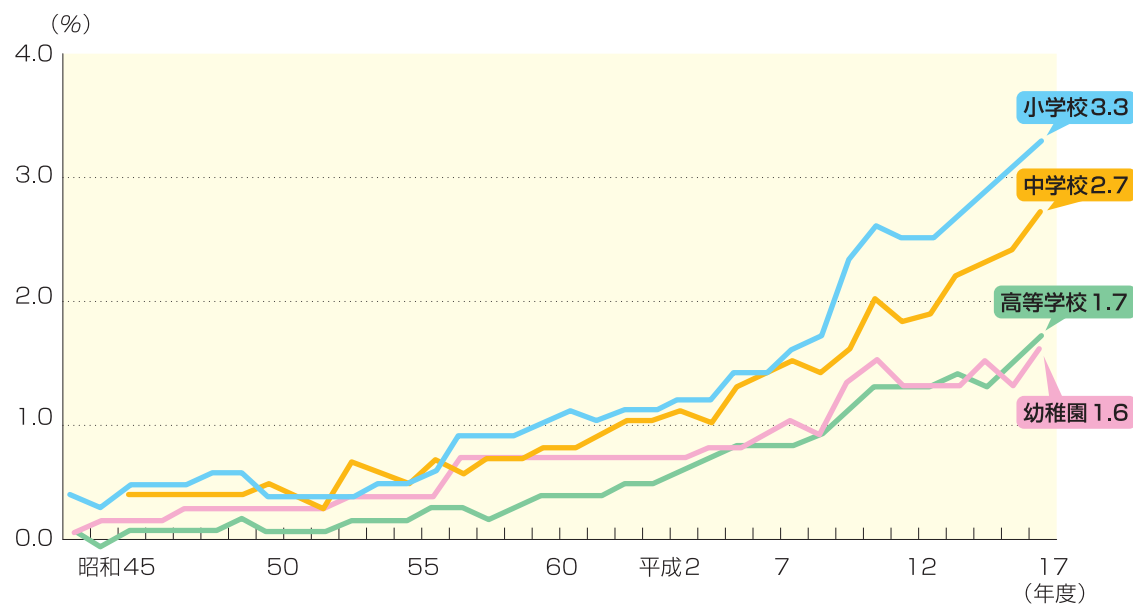
子どもたちの健康と生活習慣に関するデータを紹介します。子どもたちを取り巻く生活環境は、決してよい方向には進んでいないようです。①、②はぜんそくと食物アレルギーに関するデータで、どちらも増加の傾向がみられます。ここで示したデータの他にもアトピー性皮膚炎や花粉症などの症状も増加しているように感じます。子どもたちを受け入れる際には、こうした症状についての基礎知識と一人ひとりに対する配慮が、ますます必要になってくると思われます。

③、④は、肥満と睡眠時間に関するデータです。肥満は増加傾向に、睡眠時間は減少傾向にあります。これらは子どもだけでなく大人にも指摘できる現代社会の生活習慣の問題です。キャンプが終わって家に帰った次の朝、ふだんより早く目覚めてしまうことがあるように、キャンプには基本的な生活習慣を変える可能性がありそうです。生活習慣は日常生活のウェイトの方が大きいので、短期間のキャンプで結果を出すことは難しいでしょうが、問題に気づくきっかけにはなるでしょう。

子どもたちの生活を預かるキャンプ指導者は、健康や生活習慣といった現代的課題も念頭において指導にあたっています。

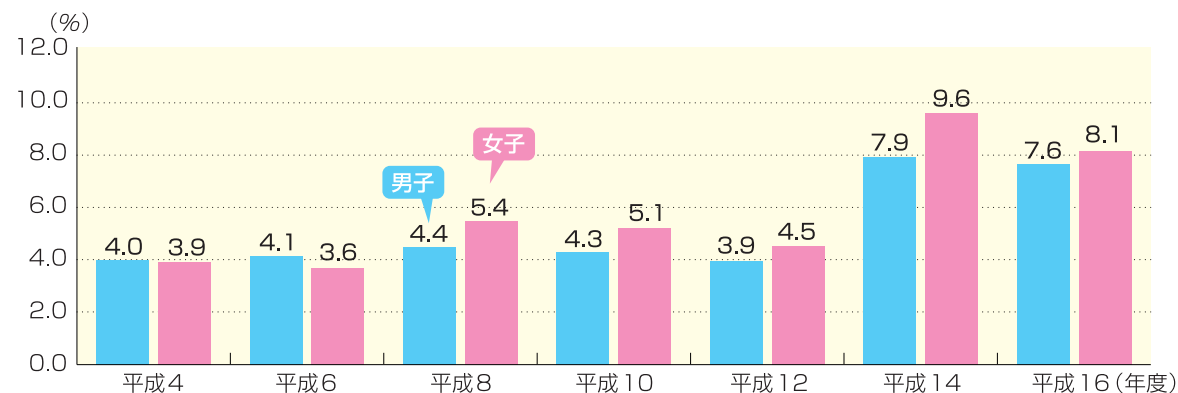
①ぜんそくの者の割合の推移

(資料:学校保健統計調査報告書)



各学校種とも上昇傾向で推移しているが、平成17年度は全ての学校種で増加している。ぜん息の割合が最も高いのは小学校で3.3%となっている。

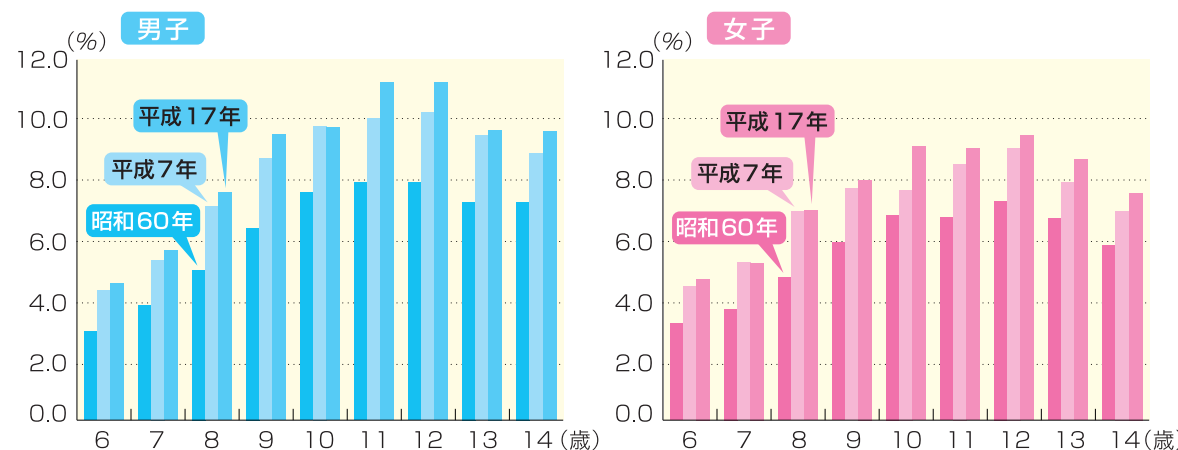
②食物アレルギーがある児童・生徒の割合の推移 (資料:文部科学省「データからみる日本の教育 2006」)



食物アレルギーがある児童・生徒の割合は、平成16年度において、男子7.6%、女子8.1%となっている。
注意:アレルギーがあるとされたことがある者のうち、医師により食物類(卵、牛乳など)を起因物質(アレルゲン)として言われた者の比率である。

③肥満傾向児の割合の推移

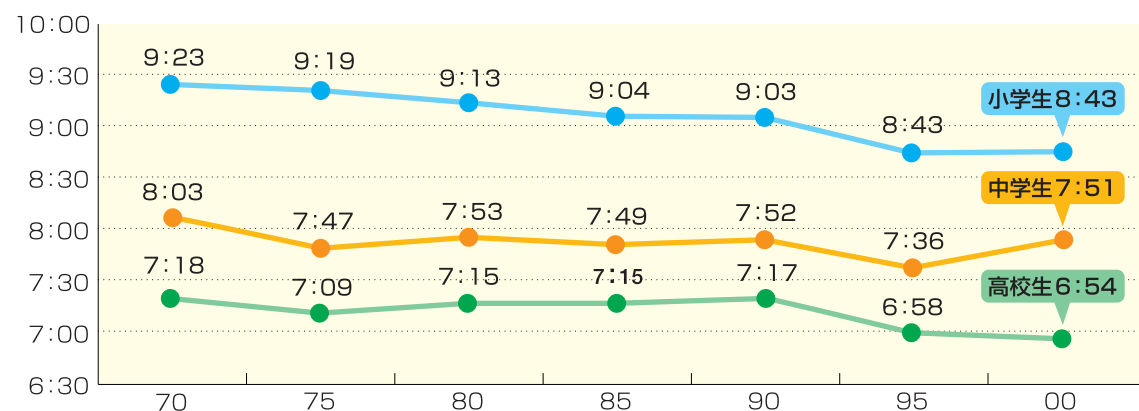
(資料:学校保健統計調査報告書)



注意:「肥満傾向児」とは、性別・年齢別に身長別平均体重を求め、その平均体重の120%以上の者である。

④子どもの睡眠時間の推移(平日)

(資料:NHK放送文化研究所「国民生活時間調査」)



キャンプ なるほど データ

キャンプは、自然環境、活動内容、指導者、仲間などのさまざまな影響を受けて、心身の成長や健康にとってもよい効果があることがわかってきました。そこで、いくつかの研究からわかってきた「なるほど」の発見について紹介します。

子どものころ参加したキャンプで大人になってからの環境に対する行動が変わるか!?

大自然の中で行われるキャンプは、環境教育の実践の場としても期待が寄せられています。例えば、キャンプで環境教育プログラムを行うと、環境に対する態度や、自然に関する知識に高い効果が上がることが分かりました。また、2週間の長期キャンプを行うことで、自己成長や人間関係には、それぞれのキャンプの活動内容や指導法の違いで一定した効果が見られなかったものの、感覚的自然認識は安定して向上することが明らかとなっています。実際に多くのキャンプで、ネイチャーゲームを行ったり、環境に配慮したキャンプ生活を送ったりと、環境教育の実践の場として、キャンプを活かしていると思います。

環境教育の最終的な目標は、「環境に対し責任ある行動がとれるようになること」と言われています。「キャンプに参加して自然に興味を持つようになった」、「キャンプが終わってから物を大切にするようになった」といった感想を保護者の方からよく耳にします。指導者としては、苦勞が報われた気持となり、ほっとする瞬間です。ところが、そこで、ふと疑問が湧きます。このキャンプに参加した子どもたちは、大人になってから本当に、環境に配慮した行動をとっているのでしょうか？ キャンプの効果が大人になるまで続いているのでしょうか？

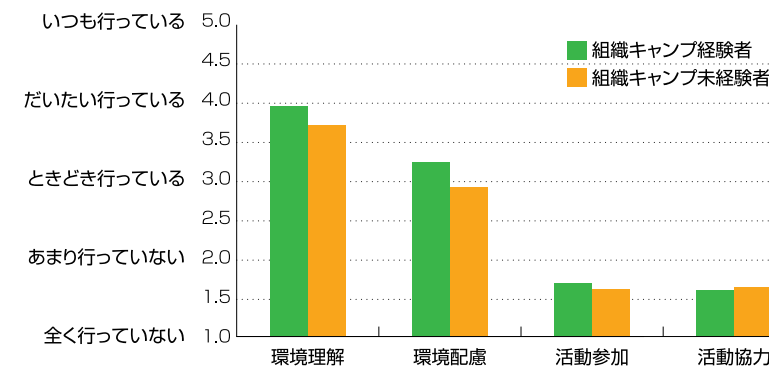
アメリカの環境教育で、Significant Life Experiences (環境行動につながる重要な体験) という研究分野が注目されています。成人後の環境に対する行動に影響を及ぼした過去の決定的な体験を探る研究です。この研究分野で、現在の行動に影響を及ぼす要因として、自然体験、家族、所属団体、教育などがあることがわかってきました。



キャンプ経験者の方が環境行動をとる

キャンプにも、このSLEを応用した研究報告があります。子どもの頃、6泊7日以上キャンプに4回以上参加した組織キャンプ経験者と、2泊3日以上キャンプに参加したことのない組織キャンプ未経験者を比較したところ、組織キャンプ経験者の方が、環境にやさしい商品の選択、省エネルギー、ゴミの分別など、比較的

日常で実践可能な環境行動をとっていることが明らかとなりました。ところが、地域や民間団体の環境活動への参加や協力など、参加の機会が限られ、時間、お金がかかるものにまでその差は見られませんでした。

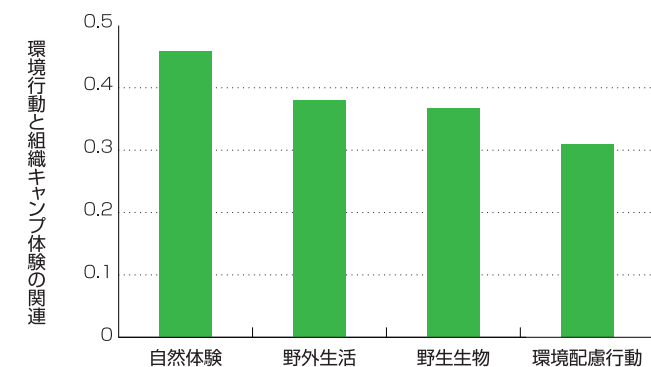


出典：少年期の組織キャンプSLEが成人後の環境行動に及ぼす影響、筑波大学修士論文、岡田成弘（筑波大学大学院）調査

キャンプ中の自然体験こそが成人後の環境行動に影響を及ぼす

さらに、成人後の環境行動に影響を与えた組織キャンプ中の出来事を分類したところ、自然の中での活動、登山、沢遊びなど直接的な自然とのふれあいや野外あそびを表す自然体験、雨ガッパを着て活動したり、お風呂をがまんしたりする野外生活、野生動物との遭遇や高山植物を見たなどの野生生物、指導者による環境行動の4つに分けられました。さらにこの中でも、とりわけ自然体験が、

成人後の環境行動にもっとも関連していることがわかりました。環境に配慮したキャンプ生活や指導は、決して無意味なことではありませんし、自然の中で生活する上での大前提ですが、それよりも子どもの頃の「生」の自然体験の方が、成人後に実際に行っている環境行動に強い影響を及ぼすことを示しています。



出典：少年期の組織キャンプSLEが成人後の環境行動に及ぼす影響、筑波大学修士論文、岡田成弘（筑波大学大学院）調査

キャンプにはさまざまなねらいがあり、活動内容があります。環境への配慮を特に強調しているキャンプであれば、もしかしたらその体験や指導がそのまま将来の環境行動に強い影響を及ぼすことになるかもしれません。しかしながら、わたしたちキャンプ指導者の最大のオリジナリティは自然を相手にしているということです。安全に配慮し、環境に配慮して、参加者に「本物」の自然を体験させてあげることで、将来身近なところから環境行動のとれるグッド・キャンパーを育てられるのでしょう。

こんなキャンプ あります。

— ユニークなキャンプを紹介します。 —

難病と闘う子どもとその家族のために

森の中を元気に走り回り、虫を捕まえ、川で遊び、お腹いっぱいご飯を食べ、みんなでひとつの火を囲む子どもたち。そんな子どもたちを愛おしそうに見守る親たち・・・夏になるとさまざまな場所でみられるキャンプの風景ですが、この子どもたちは、難病を抱えた子どもたち、そして難病を克服した子どもたちとその兄弟なのです・・・

このサマーキャンプは、ファミリーエージェンシー（以下FA）という団体が1987年から始めたものです。FAは、小児ガンなどの難病を持った子どもとその家族が、日常の緊張から開放され、難病を克服する勇気と生きる喜びを得ることができるように、そして、家族の相互ネットワークを広げるために、設立されたボランティア・グループです。

サマーキャンプは、FAがメインにしている活動で、子どもたちとその家族が自然とふれあい、楽しく過ごすことを目的としています。毎年8月下旬に2泊3日の日程で行われます。キャンプのスタッフは、医師、看護師、社会人、学生と立場は違いますが、全てボランティア、キャンプの企画もボランティアが行います。キャンプでは、至るところで元気な子どもたちの声が響き渡ります。私たちボランティアから見ると、自然の中で元気良く遊ぶ子どもたちは、どの子が病気のなかまだったか見分けがつかず、もちろん、医療的なケアが必要な子どもたちには、医師・看護師の医療スタッフがつき、夜間に医療機器を使う子どもがいる場合には交代でケアするなど、安全には万全を期しています。また、親たちが交流を深めるとともにさまざまな思いを共有する家族セッションの時間もあります。

20年という月日の流れの中で、子どもの頃にサマーキャンプに参加したメンバーがボランティアとして参加してくれるようになりました。自然の持つ力、ひとの持つ力、そしてキャンプの持つ力を感じさせてくれるキャンプです。



文 野口和行（のぐちかずゆき）
1967年生まれ。大学生の時にキャンプと「出会って」しまう。現在は大学で教員をしながらさまざまな人々とキャンプを楽しんでいる。日本キャンプ協会指導者養成委員。
ファミリーエージェンシーの活動は、<http://www17.plala.or.jp/fa-ag/> でご覧になれます。サマーキャンプのボランティア募集中。

認知症高齢者キャンプ

「高齢になって、認知症になったら」そんな心配をしたことはありませんか。現在の福祉の体制ではニーズが尊重されず、「食べて、寝て、出して」だけを保证されて、狭い空間で何年も過ごすざるを得ません。でも、少年時代を自然の中ですごした高齢者の中には、ハイキングブームやガーデニングブームが示すように、認知症になっても自然とふれあって、自由に暮らしたいと望む人もたくさんおられます。

また、高齢者の施設は少ない経費で運営されているので、どうしても人手不足になりがちです。知らない人たちと、慣れない生活の場で暮らすことは、認知症の高齢者にとって不安だらけです。

キャンプは高齢者のこうした自然への欲求を満たし、人への不安を取り除くいいシステムなのです。

里山のような穏やかな自然の中で、ボランティアとマンツーマンになって、ゆったりと自分のペースで過ごす時間を私たちは大切にしています。例えば、徘徊ということを考えてみてください。施設や自宅周辺での徘徊は問題行動です。迷子になったり、交通事故の可能性があったり。だから介護者はそうならないように、いろいろな制限を加えてきます。でも、自然の中では「徘徊」と「ハイキング」は同じことです。車の来ないところで、誰かと一緒に歩ける世界は、認知症の高齢者にとってまさにパラダイスです。

そこでさまざまな会話が弾みます。草も花も懐かしい昔を思い出させてくれます。薪でご飯を炊くことも昔遊びに興ずることも「回想」そのものです。

キャンプだけでなく、医療、介護、レクリエーションなどさまざまな専門家と若いボランティアが一緒になって、楽しい世界を紡ぎだしてくれます。



元家具職人の高齢者は竹細工のおわんの出来具合にご満悦



流しそうめんは昔のことをいろいろ思い出させてくれる。

文 石田易司（いしだやすのり）

1948年、京都府生まれ。学生時代に組織キャンプに出会い、大学卒業後、高校教諭を経て、朝日新聞社入社。15年間、アサヒキャンプ長をする。1998年、朝日新聞社退社、桃山学院大学教授、現在に至る。日本キャンプ協会専務理事、NPO法人キャンピズ代表、大阪市立いきいきエイジングセンター館長などキャンプ、高齢者に関する活動中。主な著書に「認知症高齢者キャンプマニュアル」（明石書店）、「いきいき高齢者キャンプ」（朱鷺書房）など。

良いキャンプには良い指導者が必要です

日本キャンプ協会ではキャンプ指導者の養成をしています。それは、質の高い自然体験のためには、良い指導者が不可欠だからです。資格を持っている指導者は全国に約2万5千人。全国の様々なアウトドアシーンでキャンプ指導者が活躍しています。

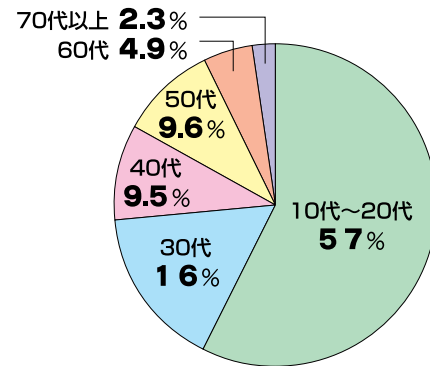


都道府県別指導者数

- ベスト5
1. 東京都 **8,619**名
 2. 埼玉県 **1,823**名
 3. 愛知県 **1,802**名
 4. 大阪府 **1,685**名
 5. 神奈川県 **1,310**名
- 1県あたり平均 **607**名

※ 各県協会に所属する指導者数を表しています

指導者の年齢構成

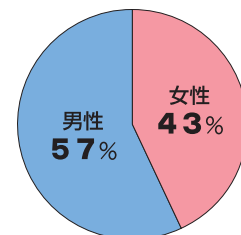


資格別会員数

- キャンプディレクター1級 **1,202**名
 キャンプディレクター2級 **2,769**名
 キャンプインストラクター **22,685**名
合計 26,718名

※ キャンプインストラクターは20時間、ディレクター2級は80時間、ディレクター1級は160時間の学習内容を修了した指導者です。

登録指導者の男女比



(2007年3月現在)

キャンプ・インフォメーションセンターから

社団法人日本キャンプ協会では、キャンプのことなら何でも相談に応じる「キャンプインフォメーションセンター」を開設しています。2006年の相談実績から、キャンプの傾向を見てみましょう。

2006年1月から2006年12月の相談実績

相談内容のベスト5

- ① プログラムの相談 情報提供 **30%**
(キャンプの企画・運営についてのアドバイス、アウトドアでのゲームやキャンプファイアーについて、安全管理、野外生活技術について)
- ② キャンプ紹介 **21%**
(子どもが参加できるキャンプ、スキーを実施する団体を紹介)
- ③ 指導者紹介 **13%**
(学校や地域キャンプの企画・運営、キャンプファイアー指導、アウトドアスキル講習会等の講師など)
- ④ キャンプ場紹介 **11%**
(個人の条件にあったキャンプ場、団体用のキャンプ場など)
- ⑤ 取材・出演依頼 **8%**
(連休・長期休暇に向けたアウトドア特集や安全特集の取材、アウトドアスキルの指導・助言のためのテレビ出演など)
- ⑥ その他 **9%**
(資格の問い合わせ、ホームページや発行物に関する問い合わせなど)

相談実績から見た2006年のキャンプ傾向

自然体験の重要性が認められてきたからか、実施するためのノウハウを求められることが多くなりました。「大切なことはわかるけどどうやればいいのか」ということでしょうか。保護者や指導者など大人自体が小さい頃の自然体験が少ない世代に入ってきました。これはかなり重要な課題を抱えてきたように感じます。子どもが参加できるキャンプの問い合わせは、幼児及び低学年がほとんどになってきました。ニーズの低年齢化は確実にようになってきたことがうかがえます。(コーディネーター 荒木恵理)

■ キャンプインフォメーションセンターへのお問い合わせは

- Eメールで info@camping.or.jp
 電話で **03-3469-0233** (月~金/10:00~18:00)
 FAXで **03-3469-0504**
 手紙で 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
 国立オリンピック記念青少年総合センター内

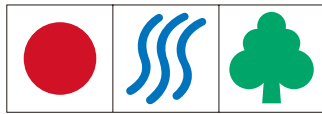
専門のコーディネーターがお答えいたします。

Camp Data Book 2006

2007年3月31日発行

- 編集 社団法人日本キャンプ協会 調査研究委員会
 平野吉直 大石示朗 井上忠夫 小泉紀雄 坂本昭裕 多田聡 岡村泰斗 月橋春美 戸室勇児
 発行者 酒井哲雄
 発行所 社団法人日本キャンプ協会 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立青少年センター内
 TEL: 03-3469-0217 FAX: 03-3469-0504
 E-mail: ncaj@camping.or.jp URL: <http://www.camping.or.jp>

印刷 大日本印刷株式会社
 発行 10,000部



NCAJ

National Camping Association of Japan